二次元ファイター
ドリーミン
2D FIGHTER DREAMIN
上田ながの
表紙イラスト：ねむ
試し読み版
二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『二次元ファイタードリーミン』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

二次元ファイター
ドリーミン
2D FIGHTER DREAMIN
上田ながの
表紙／ねむ
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

虹野夢子（にじのゆめこ）

二次元ドリーム文庫を愛読している女の子。陵辱は嫌いで、「二次元ファイタードリーミン」に変身して、二次元ドリームノベルズのヒロインを救うために本の世界に入り込む。

西園寺涼子（さいおんじりょうこ）

『監獄島の洗脳捜査官　麗しき淫肉奴隷』のヒロイン。監獄内の事件を解決するため、看守として潜り込んだが、成川に洗脳されている。

檜山沙紀（ひやまさき）

『監獄島の洗脳捜査官　麗しき淫肉奴隷』のヒロイン。涼子と同じ目的で囚人になりすまして監獄に入るも、成川に洗脳されてしまった。

成川孝則（なりかわたかのり）

元刑事で、犯罪に手を染めたため涼子に逮捕され、収監されている。催眠術で人々を洗脳し、事件を起こす。

「な、何これ……何なの……さ、サイテーじゃん……」

一人の少女が怒りに燃えていた。

少し茶色がかった肩の辺りで切り揃えた髪に、クリクリと丸く、吸い込まれそうな程に澄んだ瞳を持った少女。それ程大きくない胸元に、あまり絞り込まれていないくびれの持ち主ではあるが、そこが「女の子」を感じさせた。

名を虹野夢子という。

その夢子が学校の制服姿のままベッドに寝転がりつつ、プルプルと肩を震わせる。怒りを抑えきれない。

そんな怒りの原因は一冊の本にあった。

タイトルは『監獄島の洗脳捜査官　麗しき淫肉奴隷』。二次元ドリームノベルズの一冊である。内容は簡単なものだ。

とある事件の捜査の為に、囚人を集めた監獄島に赴いた二人の捜査官が、犯人の催眠術――いや、洗脳術を受けて激しく陵辱されてしまうというものである。

陵辱――そこが夢子の琴線にもっとも触れる箇所だった。

（わ、私はラブラブなエッチ話が好きなのに……）

同級生には変わり者扱いされてしまうが、夢子はエロ小説を読むのが大好きである。エロ小説の中に描かれるエッチな愛の形こそ至高である――と固く信じているからだ。だか

ら毎日学校帰りに二次元ドリーム文庫を買って帰っていたのである。
だからこの日も、文庫を買う予定だった。待ちに待った竹内(たけうち)けん先生の『ハーレムキャッスル3』である。が、残念なことに夢子が書店に着くと同時に、最後の一冊が売れてしまったのだった。
仕方がないので別のものを買おうと思ったのだが、他の文庫は既読のものしかない。
と、そんな時偶然見かけたのが、二次元ドリームノベルズだった。今まで存在は知っていたけれど、新書サイズということで敬遠していたレーベルである。一瞬迷ったが、文庫が手に入らないのでは仕方がない――という訳で、ノベルズに手を出してみたのだ。
(お、同じ二次元ドリームだから買ったのに……)
「何なのこれは⁉」
もう一度部屋中に怒声が響く。
自分が見たかった愛がない。
悪党共に主人公達がいいように嬲られているだけではないか。気づいたら最後まで読んではいたけど……。
「ゆ、許せない！　これじゃあ涼子さん達が可哀相すぎる」
涼子さんというのは、小説の主人公である西園寺涼子のことである。
(助けたい。何とかして助けないと！)

読んでいた本の登場人物でしかないというのに、本気でそんなことを考えてしまう。たとえ物語の中であっても、不幸になってしまう人を見過ごすことはできない。

（お願い神様。私に力を下さい。涼子さん達を助け出す為の力を……）

だから少女は本気で願った。胸に手を当て、神に求める。小説内での主人公達の運命に、自然と涙まで溢れ出した。それ程までに純粋な想い――神に届かない筈がない。

天啓のように、少女の脳裏に一つの言葉が浮かび上がる。

「……ドリームチェンジ……」

ポツリッと夢子はその言葉を呟いた。

刹那――少女の小柄な身体が輝きに包まれる。ベッドに寝転がっていた身体が、光の中で宙に浮かび上がっていった。

（な、何？　何が起きたの？）

自分でも何が起きたのか分からない。思考が渦を巻く。

そんな混乱の中で、身に着けていた制服が光の粒子と変化していった。上下セット五百円で買った安物の下着も、消え去ってしまう。剥き出しになる裸身。肌理の細かい白い肌が曝け出され、大きくはないが形のよい乳房が揺れた。毛も生え揃っていない秘裂まで晒されてしまう。

しかし、それも一瞬のこと。次の瞬間には光の粒子が裸身を包み込み、新たなる衣装を

構成していく。
身を包むは燃えるような朱を基調としたボディースーツ。胸元に添えられた大きなリボンが特徴的だ。秘裂を隠すのは白いレースの下着。同時にフリル付きの紅いスカートが構成され、腰回りを隠す。脚を白いニーソックスが包み込む。スカートとニーソックスの間に作り上げられる白い絶対領域が艶めかしい。
更に靴まで作り上げられる。衣装と同じ紅い靴。踵部分にあしらわれた羽を思い浮かばせる装飾が可愛らしい。同時に手を紅い手袋が隠す。
そして最後に構成されたのは、左右の耳元からアンテナのようなものを伸ばすバイザーだった。その姿はまるで戦う変身ヒロインのようである。
溢れ出していた光が消え、夢子の身体は部屋の中央に降り立つ。それと共に、再び脳内にある言葉が浮かび上がった。
「二次元ファイター……ドリーミンッ!!」
それが変身をした夢子の新たな名である。
「な、何これ……凄い。身体中から力が溢れてくる。私……へ、変身してる。二次元ファイタードリーミンに変身してる！」
夢子はすぐに自分がどういった存在に変わっているのか理解した。理由は分からないけれど、自分の知識の中に二次元ファイターという存在の能力が刻み込まれていく。

「でも、どうして？　まさか本当に神様が私の願いを聞いてくれたの？」
夢子は自分の姿をまじまじと見つめながら、疑問を口にした。
勿論、誰も答えてくれる者はいない。それでも、少女は確信を持ったように紅い手袋に包まれた掌を握りしめる。
「そう。そうだよね。きっと神様も、涼子さん達の運命を嘆いているんだ。だから私の願いを叶えてくれたんだ」
何度も少女は頷く。そして気合いを入れるように一度胸の前でパンッと腕を鳴らした。
「だったらやってやるわ。こんな酷い陵辱の運命から、涼子さん達を救ってみせる！　それが二次元ファイタードリーミンに与えられた使命なんだから」
自分に発破を掛けるような言葉を紡ぎながら、夢子は『監獄島の洗脳捜査官　麗しき淫肉奴隷』を再び手に取った。そしてその表紙に掌を添える。
（神様に与えられた二次元ファイターの素晴らしい力。存分に発揮させてもらうよ）
心の中で自分に力を与えてくれた存在に感謝しながら、少女は一度深呼吸し――。
「ドリームダイブ!!」
その能力を解放した。
ドリーミンの全身が輝き出す。溢れ出す光は、夢子の肉体そのものだった。二次元ファイターの肉体自体が光の粒子に変換されていく。溢れ出した光は小説に吸い込まれるよう

に集中していき、そして――少女は『監獄島の洗脳捜査官　麗しき淫肉奴隷』の世界へと侵入を果たした。

これが二次元ファイター最大の能力『ドリームダイブ』である。

二次元ファイターはその名の通り、二次元世界の戦士。ありとあらゆる二次元世界に侵入し、その世界に介入することができるのだ！

＊

「……ここは？」

ゆっくりと夢子は瞳を開く。視界に映し出されたのは、寒々しいコンクリートに囲まれた、小さな独房の光景だった。個人用の独居房であり、当然のことながら他の人間の姿は見えない。

「……なるほど。私はここでは女囚って訳なのね」

自分の姿を確認しながら、自分自身に言い聞かせるように呟く。因みに身に着けている服も、Tシャツにスパッツという女囚人用の服に変わっていた。

（どうやらこの世界の住人に相応しい役柄を与えられるみたい……。確かに、この方が動きやすいや）

自分の能力についての知識は、何故かすっきりと脳内に入り込んでくる。お陰で悩むこともない。

（さて、ここからどう動くかだけど。やっぱり女囚ってことだし、涼子さんより先に、檜山沙紀さんと接触した方がいいかな）

檜山沙紀とは、監獄島の登場人物の一人である。監獄島で起きる囚人連続死事件の真相を掴む為、囚人として島に潜入している捜査官だ。因みに主人公である涼子は看守として島に赴いている。

（何とかして成川の洗脳術のことを教えてあげないと）

監獄島のストーリーを思い出す。

涼子と沙紀の二人は、嘗て涼子が逮捕した男である成川孝則の手によって催眠術を掛けられてしまうのだ。そしてこの成川こそが、連続死事件の犯人でもある。催眠術によって、囚人達を自殺に見せかけるなどして殺していたのだ。

（その事実を早く知らせれば、あんな酷い陵辱を受けなくて済むかも知れない。何よりも、あの結末を避けられるかも知れない。ううん、もしくは私が成川を倒してしまってもいいか。最後さえ変えられればいい訳だし）

結末については思い出したくもない。あんな最後だけは、迎えさせたくなかった。

（何とかここを出て、沙紀さんか成川に接触しないと……）

そんなことを考えながら、独居房の鉄扉に視線を移す。

「囚人番号三百五番。作業開始の時間だ！」

いうと乱暴さを感じさせる口奉仕とは違い、どこまでもねっとりとした舌使いだった。
「んふっ……美味しいわ。堪らない味ね。やっぱりペニスはこうでないと」
妖艶に笑いながら、肉棒を唾液塗れに変えていく。
（あんなの……私には無理だよ……。やめて、そんなの見せないでよ……）
夢子にとっては恐怖すら覚えてしまう光景だった。
だが、どんなに願っても捜査官達は自らの行為をやめようとはしない。
「いくわよ」
男達に対して微笑みかけてみせると、その大きいとはいえない口を開き、二本の肉棒を同時にしゃぶり始めた。
「んぶっ！　んぶえっ！　んげっ！　おごごっ！」
やはり二本はきついらしい。唇が裂けてしまうのではないかという程に開かれ、何度も涼子は咳き込んだ。それでも行為自体をやめようとは決してしない。苦しみで眦に涙を浮かべながらも、肉棒を更に喉奥へと飲み込んでいこうとする。
（綺麗な顔なのに、あれじゃあ酷すぎるよ）
咥え込んだペニスの圧力で、唾液が口端から押し出されていた。口回りは自力で食事を始めたばかりの子供のよう。じゅごっじゅごっと肉棒が蠢くと、唇が捲れ返るという無様な顔を晒すことになる。出会った時の理知的な印象は、完全に消え去ってしまっていた。

えっちなシーン試し読み
ここからスタート！

「さあお嬢ちゃん。今度は君の番だよ」
夢子とて見ているだけでは済まない。呆然と二人の行為を見つめていると、囚人が不気味な笑みを向けてきた。わざとらしく腰を突き出し、肉先をこちらの頬に密着させてくる。
（ひっ！　い、いやっ！　いやぁあああっ！）
ペニスはどこまでも生温かかった。白い頬が押され、少し凹んでしまう。少しざらついた様な感触が、嫌悪感を増幅させた。
「私に任せて」
だが、心に身体は反してしまう。これ以上ないというくらいの笑みを浮かべ、自ら密着した肉棒に頬ずりまでしてしまった。
（気持ち悪い！　気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪いのぉっ！）
悲鳴は誰にも届かない。
何度も頬ずりを繰り返した後、手でペニスを握ることになってしまう。手袋越しでも掌に肉棒の熱気と、硬度が伝わってくる。
「凄く硬いね。それにあっつい。私を見てこんなにしたの？　何だか嬉しいな。たっぷり気持ちよくしてあげるからね」
伝わってくる感触に、微笑んでしまう。ニコニコと笑いながら、醜悪な肉棒を小さな掌は勝手に扱き始めた。ペニスを一回扱き上げるたび、肉茎は大きさを増す。肉胴に浮かび

上がる血管が、ヒクヒクと震える様が不気味だった。
（さきっちょが動いてる。怖い。何でこんなに動いてるの？　あ、な、何か出てきた。変な液が出てきたよっ！）
肉棒を扱き続けると、亀頭先端部から半透明の液体が分泌され始める。扱く手袋に絡みつく液体。溢れ出す液体は粘着性が高く、指に絡んだそれが糸を引く。
（も、もしかしてこれがカウパー汁なの？）
エロ小説を読むのが趣味だけあって、それが何なのかはすぐに分かった。
「カウパーがこんなに出てきた。そんなに気持ちよかったの？」
心で理解できてしまえば、言葉が口をついてしまう。自分から積極的に粘液を指に絡めると、それを肉茎全体に塗りたくっていく。濡れた手袋でペニスを扱き上げると、グチュグチュという淫らな水音が響いた。
「ああ、いいよ。最高だ。もう我慢できないよ。手だけじゃ駄目だ、分かるよね」
男は気持ちよさそうにうっとりと瞳を細めながら、更なる行為を夢子に強要する。
「もう、子供じゃないんだから、少しぐらい我慢しないと。でも、分かったよ。気持ちよくしてあげる」
そして今のドリーミンにはそれを拒むことができない。
（やめっ、やめてっ！　それだけはやめてっ！　わ、私はこんなところで……）

夢子だってそれなりに夢があった。やっぱり初めては本当に好きな男の子と、ロマンチックな場所で、優しいキスを交わしながら……。

こんな初めては想像だってしたことなかった。

だというのに、身体は止まってくれない。

「ほらほら、あ～ん」

最高の笑顔を浮かべながら、大きく口を開く。舌を伸ばし、誘うように動かしてみせる。

「おおっ！　やっぱり若い娘のはイキがいいなあ。ああ、楽しみだな。さあさあ、早くしてくれよ」

その姿を見ただけで、男の肉棒は更に激しく勃起する。下腹部に張りつきそうな程のそそり立ちだった。

「それじゃあいただきま～す♪」

笑いながら夢子は手を合わせ、本当に食事をするかのように頭を下げる。右手で肉茎を押さえ、亀頭を口に含んだ。

「んちゅっ！　ふむむぅ……。あは、すごくまじゅいよ」

口腔に広がるのは吐き気を覚える程の苦み。だというのに、男に対して笑みを向けてしまう。

（に、苦い。凄く苦いよぉ……。何なのこの味……。うえええっ！　吐き出して、こんな

の我慢できないよぉ）

味覚は普通に伝わってくる。少女の心は悲鳴を上げた。

（臭すぎる。おええ、気持ち悪いよ）

味だけではなく、臭いも酷い。饐えたチーズのような臭いが、二次元ファイターを襲う。

それでも肉体は止まってくれない。口腔に咥えた肉棒に、自ら積極的に舌を絡ませると、ジュポジュポと音を立てて吸い始めた。

「んじゅっ！　じゅぷっ！　ふじゅぅ……。これで、これへいいの？　こうふればいいの？　んじゅるるる……」

いかに洗脳下にあるとはいえ、フェラチオのやり方を心得ている訳ではない。チラチラと横目で二人の捜査官の姿を確認しながら、男にこれで間違っていないか尋ねる。

「そうだよ。でもそれじゃあまだまだだ。もっと強く吸ってくれないと、私は満足できないなぁ」

「もっほ？　もっほ強く吸えばひいのね。わかっふぁよ……んじゅるるるっ」

頬を窄め、下品な音を立てる。ストローでジュースを飲むかのように、肉先から溢れ出る先走り汁を喉奥へと流し込み続けた。

「吸うだけじゃだへよ。んちゅっ、ちゅずず……舌もひゃんとちゅかいなはい」

涼子からの指示も飛ぶ。彼女は大きく口を開くと、夢子にも見えるように舌を動かし、

男の肉先を舐め回し出した。亀頭先端の秘裂を舌先でなぞり、円を描くようにカリ首にも舌を這わせていく。

（い、いやらしい……。あんな舌使い私には無理だよ。無理、無理だから絶対やめて！）

だが、肉体は思いに応えてはくれない。

涼子の奉仕を確認した後、自らも口腔内の肉棒に舌を絡ませた。穿るように割れ目を責め立て、カリ首を締め上げる。

「おっく、まで、のみこへ。んぶっんぶぶぶっ……の、喉でほぺにしゅをしごくんだひょ」

更に沙紀までアドバイスしてくる。彼女は肉棒を根本まで飲み込んでいた。んぶっんぶっと苦しいのか、くぐもった息が漏れている。

「奥？　喉の……おっぐまでぇっ！　うえええっ！」

舌で肉茎を締め上げながら、二次元戦士はペニスを喉奥まで飲み込む。塞がれる食道、息さえ詰まる。

（く、くるっし……くるじいよぉっ！）

「お、ほごっ！　んぶぶぅっ！　ふぶっ！」

あまりの苦しみに、眦からは涙が溢れ出た。

「おおっ！　最高！　最高だよっ！　すぐに、すぐに射精ちゃいそうだ！」

夢子の苦しみに反して、男は歓喜の声を上げる。そのまま囚人は、更なる快楽を求めて、

おっ！　お願いだから、やめてぇっ！）

そんな光景を見つめながら、夢子の足は勝手に男達に近づいていってしまう。どんなに心で悲鳴を上げても、自分自身を止めることができなかった。

やがて二次元戦士は捜査官達と同じく、男の身体を跨ぐ。

「それじゃあ気持ちよくしてあげるね。だけど、乱暴に動いたりしちゃ嫌よ。これが私の初めてのセックスなんだからね」

にっこりと男に微笑みかける。途端に周囲から歓声が上がった。

「処女!!　マジかよ！　サイコーじゃねえか！」

「くう、羨ましい！　俺も夢子ちゃんの処女を奪いたかったぜ！」

男達の感想が耳に届く。

（は、話すなぁ。そんな言葉口にしないでよぉ）

露骨な感想に心が痛む。

「大丈夫。処女じゃなくなっちゃうけど、皆も後でたっぷり気持ちよくしてあげるからね」

が、肉体は心の痛みなど聞いてはくれない。それどころか、男達に対してこれ以上ないというくらいに媚びた笑みを向けると、自らスカートを捲り上げ、露わになったレースのショーツを僅かにずらした。隠されてきた秘部が男達の前に晒される。

薄い茂みに隠された秘裂は、散々男達の発情汁を飲まされ続けた為か、まるで淫乱な雌

えっちシーン試し読み ここからスタート!

犬のように愛液で濡れそぼち、すっかり左右に開いてしまっていた。ぱっくり開いた膣口から、ピンク色の媚肉が覗く。

「凄く綺麗な色をしてるよ。とっても美味しそうだ。いや～、夢子ちゃんの初めての相手になれるなんて感激だな」

男がまじまじと肉襞を見つめてくる。

（み、見ないで！　見ないでぇっ！）

すぐに隠したい。この場から逃げ出したい。

「ありがと。じゃあ、いくよ」

しかし、口は勝手に男に対して礼を言う。肉体はゆっくりとその場に腰を落とし始めた。夢子の意志を嘲笑うかのように、膣口に肉棒を密着させてしまう。

ぐちゅっ！

（あ、当たってる！　熱いのが当たってるよぉ！）

膣口に触れる肉棒の熱気が伝わってきた。ピクンッとペニスが反応するのが分かる。

（いや、いやいやいやいやいやいやいやいやいやいやぁあああああっ！）

嫌悪以上の恐怖を感じた。

それでも夢子の口元には笑みが浮かぶ。バイザー下の瞳を処女とは思えない程に妖艶に細め、ペロリッと唇を紅い舌で舐めた。

「それじゃあ、たっぷり私を味わってね」
ぐじゅっ！　じゅぶぶぶぶぅっ！
（くんんんっ！　は、挿入って、わた、私の膣中にあ、あつ、熱いのが挿入ってくる！）
愛液に塗れた膣は、初めてだというのに簡単に肉棒を飲み込んでいく。はっきりとした異物感が胎内に広がっていくのを感じた。硬い淫棒が膣壁を押し開いていく。まるで身体の中に穴を開けられていくような感じがした。
「んくっ！　す、すごっ、熱いっ！　私の膣中が熱いよっ！　あっあっあっ！」
悦びの悲鳴を漏らしてしまう。同時に更に腰を沈め込ませ、肉棒を奥へ奥へと飲み込んでいった。
（気持ち悪いのっ！　嫌なのっ！　こんな初めては絶対嫌なのぉっ！　助けて、誰か助けてよぉ！）
遂には救いを求めてしまうが、夢子を助けてくれる者など、誰一人として存在しない。
「ああっ！　届いてる！　子宮まで届いてるわ！」
「んっんっんっ！　い、勢いは、げしすっぎだ！　くんんっ！　い、いっくだろ、このまじゃイっちゃうだろ！」
既に二人の捜査官は完全に肉の虜と化していた。
男達は快楽だけを求めて目の色を変えている。

そして、自分自身も――。

「ほら、当たってるの分かる？」

半分程肉棒を飲み込んだところで、夢子は一度腰を止めた。肉先が膣内の何かに当たっている。

（まさか……そんな……そ、それだけは、お願いだからそれだけはやめて……）

夢子はそれが何であるのかすぐに理解した。自分がまだ少女である証。一生に一度、本当に大切な人が現れた時の為に大事にしていたもの……。

「貴方にあげるね……私の処女」

男に微笑みかける。そして――。

ぐじゅっ、じゅぶぶっ……ぶぢぶぢぶぃっ！

（んあああっ！　い、いたっい、痛いぃいいっ！　ひぎっ、ひぎぃっ！　やだ、私の、私の、私のはじ、めってがぁあああっ！）

何かが破れるような男が本当に聞こえた気がした。結合部から破瓜の血が溢れ出す。

「んくっ！　お、おく、まっで、は、いったよ。ど、どう？　わ、私のは、じめて……気持ちいい？」

破られたのは処女膜。二次元ファイターは自分の初めてを捧げた囚人に笑いかけた。

「ああ、最高だよ。凄い締めつけだ。すぐにでも射精ちゃいそうだ」

「そう……じ、じゃあ……た、たっぷり射精してね」
そして夢子は処女を失った痛みを抱えたまま、自ら腰を振り始めた。
ジュパンジュパンジュパンッ！
自分自身に対する配慮など一切ない。男を感じさせる為だけの動きだった。
（い、いだいっ！　いだいのぉっ！　動かないで、動かないでよぉっ！）
「んっんっんっ！　ど、どうでっすか？　で、射精そう？　射精したくなったら、い、いつでもわったしの、な、膣中に、だ、していいからっね」
男が女を犯している時に比するような勢いで、夢子は腰を振り続ける。口元には笑みが浮かんでいるというのに、眦からはぽろぽろと涙が零れ落ちていた。
「ああ、もう射精る。射精るよ！　受け止めてくれよ。君の子宮でたっぷり俺のザーメンを受けてくれよ！」
やがて男が限界を告げる。勃起した肉棒は、膣口が引き裂かれてしまうのではないかという程に膨張していた。
「だ、して！　た、たっぷり、濃い精液を私に流しこ、んでね」
（いや、な、膣中だけは、膣中だけは嫌！　嫌ぁっ！）
心と身体が乖離する。そして男には身体の言葉しか届かない。
「ああ、イクぞ！　たっぷり射精してやるからな！」

これまで受け身であり続けた男の方も、腰を積極的に振り始める。
じゅごっじゅごっじゅごっ！
「あっあっあっあっあーあーあーっ！」
（んぎっ！　ふひっ、ひっひっひっひっひー！）
二つの自分が悲鳴を上げた。そして――。
びゅぶぼっ！　びゅぶっ！　どびゅぶぶぅっ！
「んあああっ！　で、射精てるっ！　熱いのがわたっしの、な、っかに、い、いっぱ、いっぱいでってるぅっ！」
（いやっ！　いやぁあああっ！　できちゃう、赤ちゃんできちゃうよぉっ！　やだっ！　やだぁあああっ！）
多量の白濁液が膣内に流れ込む。下腹部に熱液が広がっていくのが分かった。男汁が膣壁に染み込む。夢子は反射的に背中を反らし、腰をビクビクと震わせながら、その液体を小さな肉壺ですべて受け止めた。
ぐびゅぶっ！　びゅぶるっ！
結合部から精液が溢れ出す。
（あ、ああ……だ、射精された……な、膣中に……膣中に精液射精されちゃったよぉ……）
自分が汚されたことをはっきりと理解する。下腹部に感じる生温かさが、夢子に対しど

こまでも残酷な現実を突きつけていた。
じゅぶぼっ！
「んああっ！」
肉棒が引き抜かれる。膣口にはぽっかりと穴が開き、カリ首によって掻き出された白濁液が、更に陰部を無残に穢す。
「そ、それじゃあ……はぁはぁ……つ、次ね……」
それでも身体は止まってくれない。一人の男とセックスを終えたばかりだというのに、荒い息を吐きながら立ち上がると、次の男の上に跨がった。
（まだやるの？　これを、ぜ、全員？　そ、そんな……む、無理よ。無理。絶対無理。死ぬ、私死んじゃう）
床には未だ数十人の男達が横になっている。彼らは全員勃起を曝け出したまま、夢子のことを待っていた。
肉の宴はここから始まる。

＊

「しゅ、しゅごい……あ、あふれてくりゅ……じ、じゃーめんが、おにゃかからあふれてくりゅよぉ」
一体何人の男と身体を重ねあわせただろうか？　最早夢子には数を数えることもできな

くなっていた。理解しているのは、何十人もの精液を流し込まれてしまったということと、未だ勃起を晒し続ける男達が残っているということ。

ぽたぽたと開ききった膣口から愛液を溢れさせながら、次の男の肉棒を飲み込んでいく。

（んああっ！　ま、また、また挿入ってきた。あ、熱いのが、わ、私の膣中に……んんんっ！　硬い、凄く硬いよぉっ！　あっあっあっ！）

何人目の男からだっただろうか？　始めのうちは感じていた痛みが、いつしか消え去ってしまっていた。膣中に肉棒を飲み込むだけで、甘みを含んだ痺れのようなものが肉体を駆け巡る。

「ふあああっ！　す、凄く貴方の大きい。こ、こんなに溢れちゃうよ」

飲み込んだ男のペニスは大きかった。挿入時の圧力だけで、これまで散々流し込まれた精液が押し出される。餌を前にして涎を垂れ流す獣を思わせる程の量だった。

「あっあっあっ！」

甘い嬌声が漏れ出す。挿入と同時に、激しく腰を振り始めた。

「いいっ！　気持ちいい！　チンポ気持ちいいよぉっ！」

男に快楽を与えなければならない――という気持ち以上に、自らの快楽を求めて何度も腰を振り続ける。肉棒を使って自慰をしているかのような姿だった。

（ち、がう……気持ちよくない。こんなの気持ちよくないのっ！）

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/